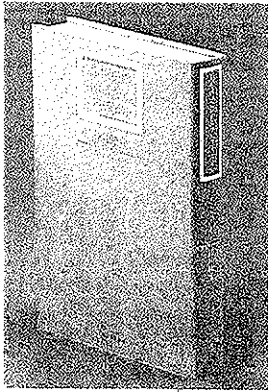


# 著者の変遷描く多声小説

時代は、前の時代を引きずる成分と新しい成分でできている。1980年執筆の「なんとなく、クリスタル」は、60年代の学生運動を内包した70年代を二掃し、約10年後に頂点を迎えるバブルを先取りした。もっとも著者が書いたのは、ブランドではなく選別のセンスのことだった。

あれから33年。モデルで大学生だった由利に代わり、今度の語り手になるのは「僕」ことヤスオ。懐かしい女たちと再会し旧交を温める。卒業を機に外資系化粧品会社に就職、ロンドンの大学院で学んだ後、PR会社をおこなった由利。再婚した江美子、モデルに復帰した直美、婦人科系の病を克服した早苗。それぞれの上に流れた時間は決してひと色ではない。

都心の一等地のペントハウスで開かれた女子会で、ゲストのヤスオは彼女たちの声に耳を澄ます。パスタのソースを褒める者あり、東京の中心部が限界集落になりかけていると語る者あり、ミラン風カッツェツを前に、夢破れて帰国す



田中 康夫 著

## 33年後のなんとなく、クリスタル

る外国人看護師の話をする者あり。

同性として証言すれば、女たちはまさにこのように話す。美食も時事問題も子宮頸がんワクチンへの疑義も、同じまな板に載せる。女たちの率直さに押され、動揺しつつはなしのヤスオの姿もユーモラスな多声小説だ。

33年前、膨大な註の後に説明なしで置いた少子化と高齢化に関する予測データ。直感に違いない。数字が示す未来は、何を豊かとするか、選別より重い選択のセンスを問われる時代になる、と。

本書の真の意義は、その直感に従って政治にも関わることになった田中康夫の33年間を描く自己言及小説でもあることだ。今回も熟読してしまふ註は、田中の理念と手柄と挫折(全然めげないが)の記録に見える。

まだ人口1億という暈を自指しますか？ 質に転換しますか？ 後者を選びそうな本書の女たち。その問いかけのために、「性事」(人口増) 抜きこの再会譚はあったように思える。

(温水ゆかり・ライター)

河出書房新社・17200円

／たなか・やすお 1956年東京都生まれ。88年に「なんとなく、クリスタル」で文芸賞を受賞し作家デビュー。長野県知事、参院議員、衆議院議員を歴任。新党日本代表